

徳島子どもと教育

徳島県教職員の会
〒771-0017徳島市川内町鶴島115
黄金ビル 徳島労連事務所内
TEL 088-665-6644
FAX 088-665-2117
携帯 090-2891-5189
eメール dp12287892@pf.lolipop.jp
2019年 9月30日 No. 240

進路保障を求める四国キャラバンを実施

9月の高校生就職採用試験開始を前にした8月28日、徳島県教職員の会・四国各県の教職員組合や全日本教職員組合の代表者などの12名が、徳島県商工労働部や県教委、県経営者協会などの経済4団体に対して、高校生の修学保障・進路保障等を求める要請行動を行いました。



徳島県に要請



県教委に要請



経営者団体に要請

県が労働問題での啓発資料を作成・配布

教職員の会は、高校生が「働く権利について学ぶ資料」の作成を長年にわたって要請してきました。今回の要請の場で徳島県商工労働部労働雇用戦略課から、昨年度末に、離職防止などを目的として、冊子「働くことの権利と義務～就職から退職まで～」を作成して高校3年生に配布したとの回答がありました。そして、来年度以降も予算を確保し、配布できるようにしたいとの回答を得ました。

冊子には、「労働時間」「年次有給休暇」「職場のいじめ・パワーハラスメント」「セクシャルハラスメント」など、重要な事柄について記載されています。

キャラバンの全行程に初めて参加して（感想）

8月28、29日と、高校生・青年の修学・進路保障を求める四国キャラバンに初めて参加しました。香川県高松市→徳島県徳島市→高知県高知市→愛媛県松山市と2日間で約700kmの車での行脚でした。ある経済団体では役員の方が、「今は新卒者は地元就職してくれない。人手が足りない。都会へ出て行く。」とおっしゃっていました。数年前と比べて就職状況はよくなっているとはいえ、世界経済を見ると米中の経済摩擦、イギリスのEU離脱、日本だって消費税のUPがあり、経済の先行きは不透明といえるでしょう。この申し入れも意味があることだと思います。参加者の皆さん、本当にお疲れ様でした。(IR)

県教委に要求書提出 ⇒ 要請にご参加を！

9月18日、徳島県教育委員会（教職員課）に同封の要求書を提出しました。この要求書に基づく要請を下記の日程で行います。ぜひ、ご参加のうえ、日頃の思いを県教委に伝えてください。

◇ 10月17日（木） 16:00～16:50
◇ 15時40分 県庁中央ロビーに集合

なお、参加してくださる方は、10月5日までに事務局の喜多（☎090-2891-5189）まで連絡をお願いします。

「^{よね}米ちゃんの楽しい授業」連載開始!

算数・数学教育を研究・実践し、全国的に活躍しておられる米田恵子さんに、かねてから機関紙への連載を依頼していました。このほど、寄稿して下さることになりました。お礼申し上げます。

なお、連載は、下記の予定です。お楽しみに！

- ①一を聞いて十を知る
- ②操作活動
- ③量にリアリティを感じる
- ④分析と総合
- ⑤いい学校（楽しい・自信・安心がキーワード）



裏面に連載第1回目を掲載！！ぜひお読み下さい。

ホームページが替わります。



現在、ホームページに新システムを導入し、構築している真っ最中！！こんなページほしいなどのご要望やご意見があればメールなどでご連絡下さい。とりあえず一度のぞいてみて下さい。

スマホからはここからどうぞ→



QR CODE

よね 米ちゃんの楽しい授業 ①

2017年度末に定年退職をし、再任用の短時間勤務で、今年は学力向上を担当しています。30数年間、数学教育協議会（数教協）の会員として小学校や中学校で算数・数学教育を研究・実践してきました。今回、過去の実践や日頃感じていることなどを5回の連載にまとめる機会を頂きました。数教協の初期の委員長 遠山啓 はたくさんの著書を残していますが、没後40年の今日でも、彼の問題提起は今日の教育問題に対する発言のようです。連載では、遠山の言葉と今の社会や教育の問題、自分の実践をつなげて一話ずつまとめていきたいと考えています。

“一を聞いて十を知る” こどもを育てる

米田恵子（公立小学校教諭・数学教育協議会四国地区委員長）

遠山啓は、『…一を聞いて一を知ることしかできない生徒を、一を聞いて十を知ることができるような賢い子どもにすること…その一はただの一ではなく構造だと考えていい…こどもが構造をとらえたとき、それを十にも百にも拡張でき、そこに本当の自発性がつくりだされ、意識的で積極的な学習が展開できる…したがって生徒はその構造をつかみさえしたら、自力で考えていくことができる…』と書いています。

戦前は、教育内容は国が決め、教師はその「方法」を研究することしか許されていませんでした。教科書に「鰻頭」を「鰻頭」と書いてあるのを見た教師が、血の付いたウナギの頭を教室に持ち込み騒ぎになった話が残っています。誤植さえ疑うことが許されなかったのです。戦後、教師は「どのように（方法）」だけでなく「何を（内容）」教えるのかを考え、実践する権利を得ました。私が若いころ、「教科書を教えるのではない、教科書で教えるのだ」と先輩教師に言われたものです。

ところが、今の学校はどうでしょうか？「何を（内容）」だけでなく、「どのように（方法）」さえ縛られてはいないでしょうか。本来は、同じ単元でも、子どもが違うので、クラスによって、年によって授業の流れやまとめの言葉は違うはずです。ノートには自分の考えを書くので、一人一人違うノートができるはずだし、話し合いの道筋が違うので板書も違うはずです。ところが、〇〇スタンダードの強制の下、教科書会社が作った板書計画通りの板書、間違いやつまずきが残っていない同じノートになってはいないでしょうか？戦後手に入れた「何を」「どのように」教えるのかを研究する『教師の（教える）教育権』と、授業中、自由にゆっくり考え、ワイワイ話し合う『子どもの（学ぶ）教育権』を守っていかなければならないと思います。

小学校中学年までで一番大切に学習したい構造は『十進構造』です。単に数の読み書きだけでなく、加減乗除の計算規則を見つけ、筆算ができるようになるための基礎・基本に「十進位取り法」と「算用数字の位取り記数法」の理解があります。基礎・基本をじっくり豊かに学ぶことで、しっかりイメージを持って理解し、新しい問題に出会った時に生きて働く力を発揮することができます。

3年生の「大きな数」では、一千万の位までを学習します。この時、一辺が1mmの正方形を一とすると「一千万はどのくらいの大きさになるでしょう」と問いかけます。「先生の机くらいの大きさ」「黒板くらいの大きさ」「教室の半分くらいの大きさ」…と予想を出させた後、一人一人がグラフ用紙を使って実際に作ってみます。一を10個集めた十は1mm×1cm、十を10個集めた百は1cm×1cm、百を10個集めた千は1cm×10cm…とぐんぐん大きくなります。百万、一千万は新聞紙を使って全員で協力して作りました。実際に作ってみると、予想よりずっと大きい1m×10mになり、教室内で広げることができません。廊下で広げると全員乗ることができました。（一番下は、手で基の一の大きさを作って一千万に乗った写真）

この3年生が、3学期の「小数」の学習で、今度は逆に、一を10等分して0.1、0.1を10等分して0.01を作っている時のことです。「この勉強、前にしたことがある」「あ～、1学期の大きな数と同じ」と言い始めました。大きな数も小数も同じ十進構造を持つことに気づいたのです。構造が同じなら、計算方法も同じです。『 $2.32L + 1.5L$ 』の筆算のやり方を話し合っていた時、「同じ位どうして計算すればいい」「0.01が0個だと考えると、1.5は1.50と書ける」「1.50なら、今までと同じように右端をそろえて筆算に書ける」とまとめていきました。「小数点をそろえて書いて計算する」というきまりのおしつけではなく、位をそろえて書くと、自然に小数点もそろえ、だから、「整数と同じように位をそろえて、筆算でたし算やひき算をする」と自分たちの言葉でまとめました。構造が理解できれば、小数×整数に出会っても、全く新しい別の学習と感ずることなく、今までの知識を元に計算方法を導き出していけるはずです。

教科書会社の配当時間に沿って、どの単元にも軽重つけず、毎時間同じようなパターン（めあて→まとめ→ふりかえり）で授業を進めていっても、構造が腑に落ちて分かる学習はできません。各学年でそう多くない重要単元の中の大切なポイントに時間をかけたいものです。公式を覚え、練習してできるようにする学習では、やり方を忘れると手も足も出ないし、新しい学習に転化することもあります。基礎・基本に、操作活動を取り入れ、頭の中にイメージが結べるまで、十分に時間をかけて学んで理解したことは忘れません。何度も復習する必要がないばかりか、あとの学習を助けます。最初は時間がかかりそうに思っても、一年間のトータルで見ると時間の短縮にもつながります。

今回は、豊かなイメージを作るための「操作活動」について書きたいと思います。

